師匠と一夜

【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談３

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18936328

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 夢男主, 夢男主×霊幻, 男性妊娠

リクエストいただきました、みーくんルートの後日談の３話目です。夢男主です。（https://pictbland.net/items/detail/1949096）←にて名前を変換して夢小説として非会員でも読めます。ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の後日談にあたります。師匠の子供がしゃべります。なおモブくん、エクボ、芹沢の倫理観が少しアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

【夢男主ルート】子供たちの沈黙　後日談３

……暇だ。
俺は家の中で横になって壁を睨んでいた。
子供達は早速友達ができたらしく、遊びに行っていない。
最初は手こずった料理も、素材が新鮮だから、切るか焼くだけで美味しいものができてしまい、手間などあって無いようなものだった。
食べて、寝る。それ以外の用事が無いのが辛い。
みーくんは日輪の仕事で昼間は不在で、いよいよ話し相手もいない。
「……そうだ。病院いこ」
いよいよ暇な老人の発想である。
実は他の６人の大人に挨拶はしたのだが、全員魂が抜けたように暗い返事しかしなかったので、話しかけに行く気は起こらなかった。
まだ薬師医師の８つの目を見ている方がマシである。
そうそう、日輪の霊能力者が４人、村に閉じ込められているが、彼らは外に出ようと半狂乱なので話にならない。
みーくんは彼らには「修行不足」と冷たい。もうちょっと優しくしてやってもいいと思うのだが……。
「やくしせーんせ」
インターホンを鳴らす。
『センセイかい。開いてるよ』
「邪魔するぜ」
せめてもの手土産にと卵焼きを手に病院に入っていく。
「茶ぁ呑みにきた」
「つくづく変わり者だね、君は」
応接室に招き入れてくれた薬師先生は、湯呑みに入れたお茶を出してくれる。
「なあ薬師先生、退屈で死にそうだよ。なんか手伝うこととかないか？」
「あいにく手は足りてるんだよ。なにせ８本もあるからね。そうだ

ね……大人が誰も教師をしてくれなくて、学校が開けられないんだ。困ってるから、できるなら手伝ってくれないかい？」
やっぱりそこか。
「……俺、教員免許持ってないぞ？」
「私立だから問題ないよ」
「そんなに勉強が得意って訳でもないんだが……」
「分からないところは私が教えてあげてもいいし、ネットで調べてもいい。……パソコンが支給されるよ？ネットに繋がるやつだ。個人的に使ってもいい」
ぴく、と耳が動く。
「……のった」

そうして俺は、結局この村の学校の先生となった。
学校の掃除をして、教科書（国から送られてくる）を確認して、
最初にやったのは。

『進路とか相談所』

というのぼりを立てて、教壇に立つことだった。
２２人の子供たちを見回して、すっと指を一本立てる。
「授業を始める前に、君たちに聞きたいことがある。君たちは人として生きていくのか？」
地を指差す。
「それとも神や霊、能力者として生きていくのか？」
天を指差す。
指をしまって、ざわめく子供達の顔を見回す。
「今、決めることじゃない。でも、勉強するにあたって、それは常に考えていて欲しい。人として生きるのなら、勉強は必要なことだ。俺や薬師先生が出来る限りのサポートをしよう。だがもし、ヒトとしての人生を選ばないのなら、」
目を閉じて、開く。
「俺たちより適した『先生』に師事した方がいい。良く考えるんだ。いつでも相談は受け付けてる。病院の応接室で昼間は待ってる

からな」
無許可だが。まぁ薬師先生は駄目とは言わないだろ。
「じゃ、授業を始めるぞー！学年がバラバラだから、各自課題を出していく方式にする。待ってる間は配られた教科書に名前を書いておくように」
前に座った蛇神の子から、順に学習進度と課題を確認していく。
「分からなくなったら手を上げろよ」
「うん」
まじめにノートに向かう姿は、普通の子供と変わらない。昔のモブを思い出して懐かしくなった。

※

「お前さん、勝手に診療所に店開きして……」
「いいだろ？ここなら先生も２人揃ってるし、お茶もすぐ出せるし」
「まったく……」
一応お茶うけの卵焼きや茶碗蒸しも準備しておきながら、生徒を待つ。
「……あの、相談したいことがあるんだが」
意外なことに、『進路とか相談所』のお客さん第１号は、日輪の霊能力者の１人だった。
「どうやってもこの村から出られないんだ。出る方法を教えて欲しい」
げっそりとやつれた霊能力者は藁にもすがるような顔をしている。
みーくんは自由に出入りしてるのに、不思議なことだ。
「ふむ。お前たち、センセイのストォカァに顔を見られたか？」
「……見られた、と思う」
「では守るために、村からハァダ様が出さないんだろうねぇ。もうお前たちは村の子だからね。美築どのは実力者だ。あれぐらい強ければハァダ様も安心して外に出せるんだろうけれど」
「そんな……」
「修行することだね。幸運な事にこのマオ村は日本でも有数の霊場

だ。瞑想でもなんでもいい。霊力を高める事だ」
代わりに薬師先生がやはり少し冷たく霊能力者に言い放つ。
しかし、この村はマオ村と言うのか。初めて聞いたな。
マオ……まお……。
「そんなぁ……」
おっと。挫けそうな相談者を放置してはおけないな。
「修行中は大変な事も多いでしょう。また困ったら、いや困ってなくても気晴らしにいらして下さい。卵焼きをご馳走しますよ」
「せ、センセイ〜！！」
霊能力者がうるうると目を潤ませて俺の手を取る。
「で、相談料ですが」

※

「金を取るのかぃ、お前さん……」
呆れたように薬師医師が言う。
「大人からは、な。俺もAmazonで買い物とかしたいし、先立つものが必要なんだよ」
「お前さんは教師の給料を日輪から貰っとるだろう」
「え、給料くれんの？ボランティアかと思ったわ。どれどれ」
パソコンで自分の口座にログインする。
……
「け、桁が間違ってねぇかコレ！？」
「あのなぁ、高僧でも逃げ出す高貴で凶悪な『持ち過ぎた者』達の教師だぞ？危険手当も入っとるが、そもそも高給に決まってるだろう」
「ええええ……やってることはただの塾講師みたいなもんだぞ、あれは……」
「できる者にはできない者の気持ちは分からんものよの。……ま、タダで相談を受けるのはあまり良くないから、大人から相談料を貰うのはいいかもしれないね」
「良くないのか？」
「あんまりこの村で徳を積みすぎると」

ぐあっと顔を寄せて薬師医師が脅してくる。
「神に成ってしまうぞ」
えい、と目を突こうとしたら、ものすごく怒られた。

※

「マオ……」
子供達に課題をやらせながら、パソコンで村の名前を調べる。
マオ……まお……そうか待てよ、この村の監理を日輪がしているのなら、日輪と関係のある言葉の可能性があるんじゃないか？
「村の名前なんて調べてどうするんです？知らない方がいいこともありますよ、センセイ」
双子の片方がノートを出しながら忠告してくる。
「気になるんだよ、どうにも暇でな」
パソコンをどけてノートの解答に丸を付けていく。
「好奇心は白ギツネを殺しますよ、センセイ」
「はは……肝にめいじておくよ」
どこにあるのか分からない放送室からチャイムが鳴る。
「休み時間の後は体育だから、運動場に集合なー！」
たいいく？と子供達が首を傾げたので、
「体を動かすことも勉強の一つだ。男女に部屋を分けて、体操着に着替えて……って、体操着なんて持ってないか。仕方ないから今日はそのままで……」
ふと、足元を見ると。
人数分の体操着が段ボールに入って置いてあって、飛び上がってしまった。
「「ヨウムインサンがさっき置いていったよ」」
「用務員さん！？会ったことないぞ！？」
「「この学校の七不思議の一つだから」」
「そういうのは本当だと逆に怖さが薄まるだろ！！ただの物理現象に成り下がっちゃうだろうが！！」
「「超自然的な現象ではあるけど……」」
「まあ用務員さんのことは今はいい。休み時間が終わっちまう。体

操着配るから、男子は隣の教室で着替えて運動場に集合なー」
「センセイ、今日は隣の教室消えてます」
「隣は保健室に変わってます」
「あーじゃあ保健室でいいだろ。最悪薬師先生の所に繋がるだけだし。女子も全員受け取ったな！？じゃあセンセイは先に運動場で待ってるから」
いい天気だ。今日は体力測定をしようと思っていたら、いつのまにか運動場に白線が引かれていて助かった。ありがとう用務員さん。
「ドウイタシマシテ……」
後ろから声がして振り返る。が、誰もいない。
「一度ご挨拶をさせてくださいよ」
「カンガエテオクネ……」
今度は前から声がして振り戻る。
また姿は見えない。くそう、いつかお歳暮渡してやる。
チャイムが鳴った。
「ラジオ体操するぞー。センセイの真似してな」
パソコンでラジオ体操第一の動画を流しながら、ちらちら見ながら動く。
「こら、龍神の子。手を振った時につむじ風を出さない。勝手に出る？能力の制御はちゃんとしなさい。それも勉強です。これ黒霧、ジャンプして飛んでいかない！」
ラジオ体操１つで大変だ。
もちろんその後の体力測定も大変だった。
『持ち過ぎた』１４歳くんが５０メートル走でテレポートして記録０秒を出したり。
霊の子鉤爪が砲丸を村の結界の外まで飛ばしてしまってハァダ様をびっくりさせたり……したらしい。
犬神の子が握力計を握り壊してしまったり。
蛇神の子が上体起こしで測定不能の体の柔らかさを見せつけたり。
いっそ生徒に手伝ってもらいながら、なんとか記録だけはつけて、初体育の授業は終わった。

※

「せんせ〜、さよーならー」
「はい、さようなら」
そろそろテストの準備をしないとな。帰ってからパソコンで作ろう。計画帝王切開の日の前にしないとな……。
帰り道。
「おっと」
進めない。ぬりかべだ。子供達にイタズラされているらしい。くすくす笑い声が聞こえてくる。
「センセイを舐めるなよ」
落ちてる枝を拾い、さっと足元を払うと壁は霧散してしまった。
「知ってたの？ざんねん」
くすくす笑いながら稲荷の子と黒霧が茂みから出てくる。
「お前らの先生をするって決めた時に、一通り勉強はしたさ」
まだ勉強中だがな。有名どころは抑えている。
「ちぇ、つまんない」
「暇なら相談所来るか？卵焼きなら出してやるぞ」
「いいの！？行く！！」
稲荷の子と黒霧と手を繋ごうとした瞬間。

目の端にギラリと光る刃物が見えて。

その先に黒霧がいて。

「──危ないっ！！」

咄嗟に庇おうとした俺は、バッサリと背中を斬られた。

「せんせえっ！！」

頬と腕を切られた黒霧が悲鳴を上げて。

「大丈夫だ」

そう言って俺は出血多量で気絶した。

※

「お前さん、よほど命が惜しくないとみえるね」
８つ目を真っ赤にした薬師先生のドアップで一瞬で目が覚めた。
「ワタシが医者じゃなかったら死んでたよ、センセイ。あとセンセイの帝王切開用に取り寄せていた輸血がたまたま有ったから助かったものの」
「……ありがとう、薬師先生」
「次は無いよ！命を大事にしなさい！流石のワタシでも死人まで生き返らせはできないからね！？」
「そうだよ、霊幻さん」
つめたーいみーくんの声が落ちてきて、恐る恐る声の主を見る。
「まさか少し目を離しただけでこんな事になるなんて……しばらく俺が見張りにつくからね。それと、家に結界も張る。犯人を捕まえるまで家にいてて」
「……犯人の目星がついてるのか？」
さっとみーくんの顔が暗くなる。
「……黒霧を産んだ男が村にいる。彼はずっと村から出たがっていた。黒霧を殺せば村から出られると思ったんでしょ。そんなワケは無いのにね。村に一度入ったヒトは、村のモノになるから、ハァダ様のお許しが無いと出られないのに」
「ハァダ様は『出たい』と言えば出してくれるんだけどねぇ。よそ者は中々試してみようとしないから」
薬師先生が困ったように補足する。
「お堂に行って言えばいいのか？」
「そうだよ。能力が高ければ返事が聞こえる」
ふうん。今度試してみるか。
「霊幻さんはしばらく俺とペアで行動だからね」
みーくんに釘を刺された。
「もうすぐ輸血が終わるな。そしたら帰ってもいいぞ、センセイ」
「……いいのか？」

「背中の傷は化けガマ蛙の油で閉じてある。もう跡も無いよ」
「凄いな……」
ふん、と得意げに薬師先生が鼻を鳴らす。
「言ったろう。この世でワタシ以上の名医はいないのさ」

※

「ちがう！俺はやってない！俺は犯人じゃない！！」
広間で１人の男が日輪の霊能力者達に責められている。
「確かに黒霧に『死ねばいい』とは言ったが、殺す勇気なんてない……！！」
そんな事を言う、おそらく黒霧の産みの親であろう男性は、ぼんやりとその光景を眺めている黒い霧をまとった少年に気が付かない。
「……大丈夫か、黒霧」
「せんせいっ！？センセイこそ大丈夫だったの！？」
はっと黒霧は俺を見上げる。
「俺は大丈夫だよ。黒霧は優しい子だなあ」
自分が狙われたってのに、俺の心配をしてくれる。
「何言ってんの……それはセンセイじゃん……俺、もしセンセイが死んでたら」
ぼわ、と黒い霧が濃くなる。
「悪霊としての人生を選ぶところだった」
低い声にゾッとする。と同時に、嬉しくもなる。生徒に慕われるのは嬉しいものだ。
「そうだ！アンタ……それに黒霧！アンタたち犯人を見てないか？俺じゃ無かったって言ってくれよ！」
容疑者の男が俺たちにすがってくる。
「いや、俺は見てないな……」
俺が見たのはギラリと光る刃物のようなものだけだ。
「……」
黒霧は見たとも見てないとも言わず、沈黙していて。
少しそれが奇妙だった。
家に戻って。

「「お母さん！！」」
友達と遊びに行っていた茂隆と永崇がひしっと抱きついてきた。
「目を離すんじゃなかった……お父さんの言ってたとおりだった。すぐ危ない目に遭うって」
涙を落としながら茂隆が言う。
「本当だよ。これからは俺かシゲタカのどちらかが必ずそばにいるからね」
永崇が少し怒ったように言う。
「今、日輪で犯人探しをしているところなんだ。分かったらまた日常に戻ってもいいと思うよ」
「……」
「……」
茂隆と永崇が黙り込む。
どうも子供たちの沈黙が気にかかるな。
「そうだ、霊幻さん、背中の傷を見せて貰ってもいい？」
「え？ああ」
霊力の痕跡でもたどるのだろうか。
しゅる、と着物の肩を落として、背中をみーくんに向ける。
「触るよ」
「ああ」
ツツツ、と明らかに性的なニュアンスを滲ませて背中を指で辿られて。
「ちょっ、と、みーくん！」
振り返って目のあったみーくんの欲情を隠さない顔に、ごくりと喉が鳴った。
「……れーげんさん、お肌の張り落ちたね」
「あ゛！？」
「でも、それでも、すごくエロい。ダメだよ、自分に気があるって分かってる男の前ですぐ脱いだりしちゃあ」
……最近そういう雰囲気にならなかったから、油断してた。
「れーげんさん、」
す、と耳元に口を寄せてくる。
「抱きたいよ。俺だけの霊幻さんになる瞬間が欲しい」

ぼっ、と一気に顔が赤くなる。
「だ、だめだろ、子供達も見てるし、俺治療中だし」
「……嫌だから、じゃないんだ」
する、とみーくんの手が肩を撫ぜる。
俺の浅ましい欲望を見透かされたようで、恥ずかしかった。
「俺はあなたのものだよ、れーげんさん。……いつでも抱かれにおいでよ。でも、」
「ぁっ」
ちゅ、と背中に唇を落とされて、独占欲の証が刻まれる。
「できれば俺を好きになって、抱かれにきてね？……その方が、ずぅ……っと気持ちいいよ」
「……っ」
誘う声にゾクゾクゾクと気持ち良い甘さが背中を走る。
「さ、そろそろ寝よっか」
ささっと着物をみーくんに直されて、切り替えて布団を敷く。
「お母さん……男なら誰でもいいの？」
「ぶっ！」
早熟気味な永崇にじと目で言われて吹き出す。
「そんなことないからな！？俺はどっちかと言うと女の人と真剣なお付き合いをしたい方だから！」
「へぇ」
みーくんの声が冷たくて顔が見れない。でもここは譲れない。大事な教育の場でもあるのだから。
「じゃあお父さんとは遊びだったの？」
悲しそうな永崇にはっとする。
「そんなことはない。お母さんはお父さんを愛しているよ。今でもそうだ。でも、お父さんは人の愛し方を間違えてしまった。だから一緒に居れないだけだ。……永崇が望むなら、いつでもお父さんの方で暮らしていいんだからな？」
子供達のための言葉をつむぐ。全てが嘘というわけじゃない。でも今、知らせるべき話でもないものは誤魔化して。
「ううん……お母さんがお父さんを嫌いじゃないなら、それでいい。お父さん、お母さんに関してはちょっとどうかしてたけど、俺

は嫌いじゃ無かったから」
苦笑して、じわ、と懐かしくなる。エクボは子供の面倒見は良かった。ずいぶん子育てを助けて貰ったものだ。
ふ、と複雑な顔をしてるみーくんに気がつく。
「……俺と結婚を前提に付き合うってのは、こういうことの連続だぜ？」
はっとしてみーくんがしまった、という顔を見せる。
「みーくんは若いしイケメンなんだ。他を探した方がいい」
「それでも、俺は、あなたがいい」
歯を食いしばってみーくんが言う。
強情だなぁ。

※

一晩明けたが、まだ広間で容疑者を尋問してるのが聞こえてくる。
「違う、俺じゃ無いー！」
……うーむ、警察とか呼ばなくていいのだろうか。どうやら内々で処理するらしい。
そうやってよそ見をしながら歩いていたら。

「霊幻さん！」

みーくんに突き飛ばされて。

「ぐぁっ！」

振り返ると永崇を背中から抱きしめたみーくんが、昨日の俺のように、ばっさりと背中を切られていた。

「……みーくん？」

ぐらりとみーくんの身体が崩れる。
すぐ薬師先生のところに運ばないと、ああ、でも俺は今、重いものが持てなくて──

「おい、そこの日輪の！！美築さんが切られた！！病院に運ぶのを手伝ってくれ！！」

ば、と振り返った霊能力者たちは。

真っ青な顔をしていた。

「犯人はコイツじゃ……？」